年が経つにれ油が浮き出てきて申し分のないものとなり、茶室の床柱として、中柱として、また壁止などに使われる。

◆檜 錆（あてさび）。・桧 錆 丸 太。～現在では越中能登地方に多く産する。大正初期まで丹波檜といって丹波、但馬地方から保津川を下って京都に入ってきたものであるが、今ではあまり見られない。この材は長さ3間ほとで元が4寸ほどあるため、元（1番木）で柱をとり、末（2番木）で茶室用の垂木や様々の小物類がとられ、昨今では作業のやり易さから檜錆丸太より桧錆を使う人が多くなったが、桧錆は洗いをかけるとき強く洗うと錆がとれてしまうので墨をとる程度に留める必要がある。これに比べて檜錆は底錆が残るもので、古来は磨砂を用いて底錆を出しその色合いを好んだものである。ただ檜錆は木質が堅く、また節が多くあるため仕上げに手間がかる。このため桧錆を使うことが多い。檜錆丸太は侘びた表情をもつため、草庵の茶室にも使われている。表情のつけ方としては、大きな節は節ナグリを施こし、また筒面にもナグリを入れることもある。

◆梅（うめ）。～梅の古木は風情のある豊かな表情をもつ。これを好んで床柱などに使うことがある。

◆楓（かえで）。～多くは使われていないが化粧棚や、茶道具に用いられる。堅い材であるが杢目が細く美しい木肌をもつ。

◆椿（つばき）。～この材も多くは使われないが、その皮肌の艶から数寄屋建築では六畳までの座敷や茶室に床柱として用いられる。

◆百日紅（さるすべり）。～皮肌を誉めて用いるが、茶室の中柱や壁止として使われる。

◆香 節（こぶし）。～非常に香りのよい香木であり、茶室の床柱、中柱、外廻りの化粧垂木などに、また小間の窓格子や壁止などにも用いられる。ただ難点は外皮が剝げ易いことである。

◆神 代 杉（じんだいすぎ）。～数百年の間地中に埋もれ変色したもので、蒼黒色で木質は堅実である。化粧板材として欄間や天井板にも使われ、また建具にも用いられている。

◆縞柿（しまがき）。・花林（かりん）。・黄楊（つげ）。・蘭（あらうき）。・黒檀（こくたん）。・柴檀（したん）。・鉄刀木（たがやさん）。～置物台、座卓、化粧棚などに使われる。黒檀、柴檀、鉄刀木は外材で中国より入ってきたものである。

木というものは根付のときだけ生きていて、加工され製品とれば死んでしまうものでなく、伸縮もあれば色艶もその時間と共に変化していくものである。製品にされて、また新たな生き方が始まる。汚れや埃を取り除いてやり、充分な思いをこめ手入れ施すことによって新たに木を生かすことが出来るのである。